ほんとに愛してたよ

のんびり桃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ほんとに愛してたよ

【Ｎコード】
Ｎ３３９０Ｃ

【作者名】
のんびり桃

【あらすじ】
幼い愛をずっと貫き通した明日美が、時を越えて、様々なことを経験していく。

プロローグ

今日朝目覚めたら、夢見たことをしっかりと憶えてた。
それは、タキのことだった。

あたしが、ずっとずっと、きっと、すんごい裏切られたようなこと
されたけど、それでも今も思ってるタキが、ふと出てきたんだろう
って思った。

だから、あたし、振り返ろうって思ったんだ。

タキ、元気かな？って。
幸せかな？って。

じゃないと、あたし、やだよ、って。

第1話：　出会い

私小川明日美、１７歳、彼、タキこと滝川和弘１６歳のときに、二人は出会った。
出会ったのは、海岸沿いのファストフードの店の前。

数脚の椅子が並んだ、ど真ん中にタキは座っていた。
『偉そうに、何？こいつ？』
私のファーストインプレッション。　これ、正直な話し。

狭い街だし、タキのことはみんな知ってるみたいだった。
「あいつ、誰？」
あたしは、友人に聞いた。
「あ～、タキだよ。　滝川和弘っていって、あんたと同じ高校じゃん！いっこ下だよ。」
ふーん、あたしと同じ高校なんだ。　それが最初。

でも・・・
あたしは、そんなこと言いながら、タキの偉そうな姿を見たときから、きっと、すんごい気になっていたんだ。

「おう、ミーちゃん！」
ふいに、タキがあたしに向かって言った。
『何？こいつ？　なんで、あたしが＜ミー＞って呼ばれてんの知ってんの？』
そう心の中で思いながらも、言葉も出ずに、タキのこと見ていた。
　口を開けて。

「ミーちゃんでしょう？　有名だからね～」

なんて軽いの？　なんで、あたしが有名なんだよ？
なんか、むかむかしたから、聞いてやれ！
「なんで、あたしのこと知ってんのよ？」
「そんな、攻撃的な顔しないで下さいよ～。　だって、あの有名な中学校の出でしょう？　で、そこで結構悪かったんだもん、知らない人、逆にいないっすよー。」
な、何～？　そうなんだ。
そうとは気づかなかった。　そう、私が出た中学校は、非常に悪かった。　新聞にも載ったし、数人家裁に送られた。
でも、私は、そこまで悪くはなかったぞ！
「そう。　でも、私はそんな悪いことしてないけどね。」
ちょっと、誇らしげに言った。
「おもしろいっすね～」
え？　何も面白いこと言ってないけど？
「なんか、ミーさん、面白い！」
笑ってる・・・　あたし、何もしてないのに。　なんで？
「ミーさん、電話番号教えて。」
「あ、うん。　これが、あたしの・・・って、なんで、あたしが、

あんたに教えなきゃいけないのよ。」

「だって、きっと話が合うような気がするからさ。同じ高校だし。」

「あ、そうか。」

とういうことで、携帯の番号と、メアドを交換した。

家に帰ってから、何で、そんな理由で交換することになったんだっけ？　と、腑に落ちないようなもやもやした気持ちでいると、ふいに、電話の呼び出し音が鳴った。

「はい」

「ミーさんっすか？」

「はい・・・」

「おれ、滝川です！」

「あー・・・・」

「あー・・・って。　残念みたいな～。　早速かけてみましたよ。」

「うん～」

「ほんと、ノリが悪いですね。」

「だって、ノリノリでも、何でしょう？」

「ほんと、やっぱ面白い。　明日、学校で会いましょう！」

「そうね、学校で会うんだよね。」

「じゃ！」　ガチャ。

何？あいつ？

っていうか、何？あたし？

振り回されてる？

ま、いっか。

学校の門を通り過ぎると、そこにタキが立っていた。
「おはよーっす」
軽いんだよ！
「おはよ」
「またまた～、なんか、暗いっすね～」
「別に、無理やり明るくしても、ヘンじゃないの？」
「無理はね。」
その時の笑顔が、私にズキンって来た。
やっぱり、あの海岸沿いのファストフードの前で気になったときのような気持ちが、間違っていないって、実感してしまった。
「今日さ、一緒に帰ろう？」
「え？　急に、何言うの？」
「いいでしょ？　一緒に帰ろう。」
「はぁ？」
何も、これっぽっちも進展してない二人が、どこに何しに行くわけ？　あたしの頭は少々混乱気味だった。
「じゃ、3年2組の教室に、俺、迎えに行きますね！」
さーっと、走って行ってしまった。
ええ～。
それでなくとも、あたしはクラスではちょっと浮いてるというか、特定の友達しかいなくって、若干怖がられてるのに。　また、下級

の子が来たとかいうの、やだな・・・

そうこうしてても、下校の時間が来てしまって、タキも来ないし、この隙に帰ってしまおうかと思ったら、階段から・・・

「ミーさん。　迎えに来たよ！　帰ろう！！」

なんなのー。
マジで来てるし。　・・・でも、少し、んーかなり嬉しいあたしがいた。

「わかった。」

きっと、頬が少し赤かったかも。

帰り道、二人で話しながら駅に向かった。

「あたし、バスで帰るし。」
「もう？　じゃ、俺んちすぐだし、寄って行って。」
「え？　いきなり、タキんちに行くの？」
「うん、いいでしょ？」
「・・・んー」

なんとなく、断る理由もなく、地元のタキんちに行った。

「あら～、かわいいお嬢さんね。　カズが女の子連れてくるなんて～」

ちょっと、ハイテンションな、でも可愛いお母さんのお出迎え。
そっか、タキのお母さんは専業主婦なんだ。　いいな・・・

「こんにちは。　初めまして、小川明日美といいます。　お邪魔します。」
そう言って、タキの部屋に通された。
案外すっきりと片付けられてて、びっくりした。

部屋の隅っこに膝を抱えて座っていると、
「ミーさん、付き合おう」
ふいに、タキが言った。
「え？！」
「なんか、俺ら合う気がしない？」
「・・・」
「付き合おうよ。」
「うん」

え？何で？　って言う、心の声と、嬉しいって言う心の声が錯綜して、でも嬉しいが勝っちゃった。
あたし、きっとタキのことやっぱり気になってたんだね。

そして、あたしたちは、その日から拙い恋をスタートさせたんだ。

第2話：　初めて

タキと付き合い始めてから、高校に行くことがとても楽しくなっている私がいた。

行けば、タキに会える。　それだけで、重かった足が、ちょっとは軽くなってる気がした。

毎日、自分のお弁当と姉のお弁当を作り、それにプラスしてタキの大きいお弁当を作る。　そんな日常が、私にとって、幸せだった。

朝、タキの教室まで行って、「ほい」ってタキに渡す。　「おー、サンキュー」それが私たちの日常。

タキが、下校時に私の教室に来て、「ほい」って空のお弁当箱を返してくれる。「うまかったー！」って。　で、「おー！」って、私は親指を立てる。　それが日常。

そのまま、タキのバイト先まで一緒に行って、私は終わるまで待ってる。
田舎のゲーセンだから、オーナーも私を知ってくれて、そこに居ることを許してくれてた。

その後、タキの家に寄って、テレビを観たり、お互いの共通の好きなアーティストの音楽を聴いたりＤＶＤを観たり。
で、私の門限を守るために、駅までタキがバイクで送ってくれる、っていうのが、毎日のスタイルになっていた。
毎日、タキといることが、私にとって幸せだった。

お互い、思春期を過ぎて、性に対しても興味はあったけど、どちらともなく、それに関しては何も触れずに時だけ過ぎて行ったんだ。

でも、ある日、なんとなく、いつものようにタキの部屋にいるとき、ふとそういう雰囲気になって、タキが私の顔の前まで来て、唇を重ねたんだ。
そのまま、私たちは、自然に抱き合い、ベッドの上にいた。　そして・・・初めて二人が重なり合ったんだ。
それは、私にとって初めてのことだったし、タキは、そうじゃなかったみたいだけど、でも、そんなことどうでもいいことだった。
恥ずかしかったけど、すごく幸せだった。　タキが、他人なのに、他人とは思えなくなっている自分がそこにいた。

「大丈夫？　痛くない？」
そう、普段のタキでは考えられないような優しい言葉をかけてくれて、私はちょっと驚いたけど、
「うん、なんか変だけど。」意思とはうらはらに、涙が出ていて、それをぬぐいながら答えていた。
その涙は、感動の涙・・・と言いたところだけど、本当に痛くて出た涙だったみたい。

その日を境に、タキとは当たり前のように体を重ねて、当たり前のように一緒にいた。　どんなときも、傍にいるのはタキだった。
若い二人は、お洒落なホテルができたらしいよ！って聞くと、二人でそこに行って遊びに行くように楽しんで、休日海に行っては楽しんで、映画に行ったり、とにかく、いっつも一緒にいたんだ。　タキなしでは有り得ない私になっていた。

もう、タキとずうっと一緒にいるんだよね？
そう、疑いもなく、思っていたんだ。

第3話：　別れ

付き合ってから、半年が過ぎた頃、あんなに青々としていた木々も色づいてきて、秋の声が聞こえてきた。

高校3年生の秋と言ったら、進路を決めなくてはならない。　でも、父も亡くなって、母に負担もかけられないし、就職することに決めた。

自動車教習所にも通い出して、その頃から、タキとちょっとずつズレが出てきたように感じていた。

そのズレは、あたしのほうに生じていたんだと思う。

女友達と、こっそり抜け出してクラブに通ってみたり、自動車教習所が忙しくなってきたりで、まだ高校2年生のタキはちょっと焦っていたみたいだった。

「いつ会えんだよ！」

ちょっと、いらついたメールや電話が度々来る。　今日はメールじゃなくて、電話だ。

「だって、しょうがないでしょう？　自動車教習所が忙しいんだもん。　タキはバイトしてればいいじゃん」

そっけない、あたし。

「何で、夜出ねえんだよ？！」

「寝てんの」

「俺、ミカに聞いたぞ。　お前、クラブ行ってんだろ？」

あたしの友人のミカだ。　なんで、ミカちくってんの？　心ん中で焦ってるあたし。

「ちょっと、社会見学だよ。」
「社会見学で毎週行くのかよ。つーか、クラブがなんで社会見学なんだよ！」
「・・・・・」
「なんとか言えよ」
「うるさいなぁ。　女の友達だって、大事でしょ？　タキだって、男友達大事でしょう？」
「答えになってねぇ」
「もういい。」

電話を切った。　おまけに電源も。

なんだか、私、ちょっと嫌気がさしていたのかもしれない。
ずっと一緒にいたいけど、だけど、自由も欲しい。　束縛されてまでの関係なんて、やだよ。

少し距離を置こうと思ったけど、タキは、どこにでも迎えに来て、束縛がどんどん酷くなる一方だった。

だからあたしは・・・
あんなに幸せで、あんなに好きだったタキに、別れを告げたんだ。
ちょっと疲れたんだよ、この関係に。

だから、バイバイって。

タキは・・・
泣いてた。　なんでだよ、って。

あたしも思った。

なんでだろう？って。

大嫌いになってるような気がした。　今は顔も見たくないし、とにかく一緒にはいられない、って。

こんな気持ちになるのって、初めてだった。

あたしは、人を嫌いになったことがなかった気がする。　いつも、良い人でいたかったのかな？　それとも、それほど好きになった人もいなかったのかもしれない。

でも、タキのこと、心の奥底から大好きで大好きで大好きで仕方なかったけど、その分今は大嫌いになりそうだった。

ほんと、なんでだろう？

とにかく離れたかったの。

それからも、タキからは何度も何度も電話が来て、メールが来たけど、無視することにした。

2ヶ月ぐらいそんなことしてて、ほとぼりが冷めた頃、タキとばったり廊下であった。自由登校になる寸前だった。

「元気なの？」

「ん・・・」　ばつが悪い。

「どうすんの？これから」

「え？」

「このまま終わんのかよ？」

「わかんない」

「じゃ、別れたままで、遊びとか行こうぜ。　免許取れたら、乗せ

てくれよ」

なんか、哀しかった。

「わかった・・・メールする」

それからは、結局、前のような恋人同士ではなくなったけど、もっといい関係になれた気がした。

タキはあと1年学校で、あたしは就職する。

その1年、気楽に行こう。　その後で、二人のこと考えていけばいいもんね。

第４話：　やっとわかったのに・・・

こんなあたしが、親の縁故で、お堅い職場に就職した。
誰もが、

「できんの～？」

って意見だったけど、案外あたしは、仕事に没頭した。　一から覚えることばっかで、正直しんどかったけど、でも楽しかった。　仕事が、とにかく好きになっていったんだ。

それも手伝って、タキとはどんどん距離が開いていってる気もしたけど、でも相変わらずたまに会うというスタンスは続いていた。

二人でいることは、恋人だろうとそうでなかろうと、そう問題ではなく、ごくごく自然だったんだ。
今となれば、それが全てだったんだろうな、ってわかるけど、やっぱり二人は子供だったんだね。
だって・・・
あたしが、やっと１９歳になったばかりだし、タキはまだ誕生日が来ないから１７歳だもの。大人なはずがないんだよね。

付き合っているわけじゃないのに、当たり前のように体も重ねるし、タキの家に行けば、

「ミーちゃん、ご飯食べていきなさいね。」

なんて、お母さんも優しくしてくれる。

「ミーちゃんが付いていてくれるから、カズも学校に行くようなものよ。ありがとうね。」

なんて。

あたし、そんなすごい人間じゃないよ、おばちゃん、って言いたいんだけど。

確かにタキは、

「学校辞めてぇー」

ってよく言ってて、

「高校だけは、とりあえず出な！」

とは、言ってるけどさ。　それって、当たり前だし。　もしかして、あたしといるから辞めたいのかもしれないし。　どっちがいいか悪いかわかんないよね。

とにかく、そんなこんなで、二人は繋がっていたんだ。

春が過ぎて、夏が来て、その夏にタキは変わった。

地元の、夏限定のバイトを始めたのがきっかけだった。　それから、がらがらっとタキが変わったんだ。

もう、あたしとはあんまり会わなくなって、あんまり筋のいい仲間じゃないような人たちと付き合うようになっていって、それが楽しいようだった。

あたしが言い出して別れたのに、あたしはそうなって初めて気づいたんだ。　タキのこと、すごく大切だったんだ、って。

どっかに行ってしまいそうで、不安だった。

その不安どおり、タキは、どっかに行ってしまった。

他の女と付き合ったり、男友達と遊び歩いたり、もう、あたしの手の届かないところに行ってしまったみたいだった。

夏が終わって、秋が来て、いよいよタキが進路を決めることになって、タキも就職を選んだ。それも、あたしみたいにお堅いところだった。

でも、タキはもう、あたしと居ることはほとんどなくて、たまに話すぐらいになっていったんだ。
あたしたちはもう、付き合ってるわけではなかったし、あたしも他の人と付き合おうって思って、社会的にもしっかりした人と付き合ったり、同年代の人と付き合ったりしたけど、どこか、何かが違ってた。

で、結局、タキの都合のいいときに会って、その場限り・・・みたいなことが続いた。
あたしは、都合のいい女になっていったんだ。

それでも良かった。
昔、タキがあたしを束縛してたときよりも、自由だったし、そのほうが楽だったから。
だけど、ちょっと・・・

虚しい気持ちもあった。

狭い街だから、タキの噂を否応なしに耳にしてしまう。　そんなとき、付き合ってないし、あたしがどうこう言うことじゃないもん。

って思いながらも、釈然としない気持ちもあったりしたのは事実で。

タキが、一頻り遊んだ後、結局あたしたちは元の鞘に戻ったんだ。

「やっぱり、ミーがいい」

そう言って。

あたしは、

「そっか。　じゃ、また元に戻ろ。」

なんて、冷静なふりしたけど、内心ほっとしてたし、嬉しかった。

あたしが、２０歳、タキが１９歳になったときだった。

二人は、特別何が変わるってこともなくて、お互いの親もわかってたし、障害もなく、ただいつもどおり付き合ってた。

どっちかと言うと、

『好きで好きでどうしようもない』っていうスタンスじゃなくて、いないと嫌だからいる、っていう、消去法的な二人の関係だった。

そんなだから、またしばらく付き合っても、タキはほかの女のとこに行ってしまったり、別れてはあたしんとこに戻ってきたりって、繰り返してたんだ。

・・・それでも、良かった。　良かったっていうか、嫌だけど、完全に別れてしまうよりも、タキとずっといたかったから。

結局あたしは、ずっとフリーで、ただ女友達と飲み歩いて、遊んで、その女友達もどんどん彼が出来ていって、あたし一人、ふらふら遊ぶだけの男友達と飲み歩いて、たまにタキと会って、そして当たり前のように体を重ねて・・・

あたしって何なの？
って、次第に思うようになるのに、それほど時間ってかからなかったんだ。

それでも、本当に、タキといたかった。　タキのことが、そうなっても、大好きだったんだ。

第5話：　いつまで続くんだろ

タキとは相変わらずで、タキもタキで相変わらずいろんな女とよろしくやって、あたしんとこにも来る、って、そんなことが続いていた。

でも・・・
あたしは、もう、結婚したいって思ってたし、このままどうなんのかな？って疑問も膨らんで来ていたんだ。

そんな頃、仕事でも若干２１歳のあたしが、顧客を１００件近く抱えるようになっていて、その一つの企業のご子息に会うようになって、その紳士的なところになんとなく魅かれていくようになっていったんだ。

タキの、率直な、本当に真っ直ぐなところとは間逆な、大人の対応をしてくれる彼。
あたしの５歳上の人だった。

それまでのあたしは、大人の男の人との付き合いをしたことがなかったし、何しろ本当は父親の愛情を受けて育っていないから、ファザコンの帰来があったのは否めなくて。　その人にどんどん魅かれていくのを、自分自身感じていた。

タキとのデートは、ファミレスか、居酒屋。　そのあと、タキんちに行くか、ラブホ。
でも、その人は、フレンチかイタ飯か、カレーならば、本格的なインドカレー、そんな感じだった。　新鮮だったんだ。

しかも、そうそう簡単に手を出さない。
そこがまた、あたしには嬉しかった。

その人と、暫くデートを重ねる毎に、どんどん魅かれて行ったのに、どこかにタキがいるんだ。　それがまた、悔しいっていうのか、虚しいっていうのか。

あるとき彼と会って、家に帰ろうとすると、あたしの駐車場にタキが車に乗って待っていることがあって、すんごく驚いたことがあった。

「何してんの?!」
「待ってたんだろ?」
「はぁ?　なんのために?　タキも彼女いんでしょ?」
「別れた」
「別れたって・・・　でも、あたし、今付き合ってるんだよ?」
「別れろよ。行こう」

ふざけないで!
そう言いたいのに、あたしはまたタキの車に乗ってた。

なんなんだろう?あたしは。
タキとは離れられないのかな。　そう、思った。

第6話：　次のページへ・・・

月日はどんどん流れていくもんだね。
あたしは、２１歳。　早く家を出たかったし、結婚が頭をちらつき始めていた。　今考えれば、早すぎる考えだってわかるんだけど。

でも、タキは相変わらず男友達と遊び歩いたり、他の女の子と遊ぶのが楽しいようだった。　思い出してはあたしと会って、あたしは、完璧キープだった。

５歳年上の人といい感じになっても、同い年の人といい感じになっても、その時はその時であわせたりしたけど、やっぱりあたしはタキが良かった。　タキじゃないとやだった。

飲みすぎたときに、あたし、ふと電話をかけたんだ。　まるで、試すみたいに。

「タキ？」
「あぁ。」
「あたし。」
「うん。」
「もう、落ち着きたい。　結婚したい。」
「俺、眠い・・・」プッ。

電話が切れた。
え？　切った？　大した話しじゃないってこと？　あたしより、眠りが大事ってこと？
すごく、落ち込んだ。　もう、だめなのかな？って。

携帯のアドレス帳を探して、５こ年上の彼に電話をかけた。

「あの・・・会いたいのですが」

「え？　今？　どうしたの？」

「どうもしてないんですけど、会いたい。」

「今日は、ちゃんと家に帰りなさい。　また、早い時間から会おうね。」

「もう、会いません。」　プッ。

今度はあたしが電話を切った。

相手はわけがわかんなかっただろう。

そして、あたしは、同級の彼に電話をした。

「あたし」

「どうしたの？」・・・と彼。

「何してるの？」

「飲んでるよ。」

「会いたいとか言ったら、会える？」

「あぁ、いいよ。」

そう言ってくれたのが、彼だった。

あたしは、もう、決めていた。

ひどいと言われても仕方ないような賭けをして、その賭けは、同級の彼が全て受け止めてくれたんだ。

もう、いいや。

タキとは、Ｔｈｅ　ｅｎｄ　だよ。　終わらせなくちゃ。

数分して、彼がタクシーで迎えに来てくれた。
「飲みなおすか？」
「そうだね。」
そして、二人は、朝まで営業してる店で、飲み明かした。

翌日の夕方、タキから電話が来た。
「俺。　昨日、電話くれたよな？」
「したよ。」
「何？」
「もう、いいの。　全て終わったから。」
「どういうことだよ？」
「もう、あたしたち会うのも、電話もやめよう。　終わりにしよう。」
「はぁ？　何？怒ってんの？昨日のこと。」
「怒ってないよ。　でも、もういいの。　終わりにしよう。」
「ふーん、じゃ、わかったよ。そうしよう。」

終わった。
あっけないけど、これでいいんだ。　そう、自分に言い聞かせてた。
もう、振り回されて生きるのやだよ。　それよりも、守られたい。
もう、落ち着きたい。

同級の彼は、なんでもあたしの言うことを聞いてくれて、無理して
高いもの買ってくれたり、美味しいところに連れて行ってくれたり、
何よりも、付き合って、半年した頃、

「結婚しようか？」

と言ってくれた。

もう、あたしは、それだけでいいや、って思ってたんだ。　なんて、安易なんだろう。　今はそう思う。

「うん、しよう」

それで、翌年に結婚式の手配をして、穏やかに付き合いが続いていった。

そんなあたしの状況を噂で聞いたタキから、珍しく家に電話が入った。

「はい、小川です」

「俺」

「何してんの？　携帯にかければいいじゃん。　っていうか、もう、電話も会うのもやめようっていったじゃん！」

「なんでだよ？　お前、なんで結婚すんだよ！」

「タキには関係ないことでしょう？」

「俺と結婚してくれ」

びっくりした。

「ふざけないでよ。　ずっとあたしのこと振り回して、今更何言ってんの？！　もう、やだよ。あたし。」

「結婚してくれ。　結婚、他のやつとしないでくれ。」

「できない。　もう、決めたの。」

タキ、泣いてた。　二度目だ。

「こんな風になってしか、ミーがどれだけ大事かって気づかなかったんだよ。　失いたくないんだ。　ずっと傍にいてくれよ。」

「あたしが、どんだけタキのこと好きだったかわかってる？　どれだけ、都合のいい女になってたかわかってる？　それでも良かったんだ。　でも、もう、限界だったんだよ。　だから、あの日、電話で最後にちゃんと聞きたかったの。　タキ、あたしを受け止めてくれるかな？って。　それなのに、言った言葉、『眠い』だよ？　終わったよ、そのときで。」

「ごめん・・・ミーがそんな風に思ってたなんて知らなかったから。」

「そうだよね。　タキは、いっつもあたしのことなんて、お構いなしだったでしょう？」

「そうかもな。悪かった。」

「とにかく、あたし決めたから。　もう、かけないで。」ガチャッ！

涙が流れてた。

これでいいの？　って、自分の心に問いかけてた。

答えは、

『ダメ』なのに、

無理やり『いいの！』に変えてる自分がいた。

タキ、ずっと一緒にいたかったよ。　タキしか、あたしにはいなかったのに。　もう、後戻りできないんだよ。

目がどうしようもないぐらい腫れるほど、泣いた。

もう一度やり直せないかな？　とか、散々考えたけど、きっと何度も同じことを繰り返す気がした。
だから・・・　先に進むことに決めたんだ。

あたしと、タキが大好きだった曲が流れた。
ますます、涙が流れた。

本当に、本当に大好きだったんだよ、タキ。
誰よりも、何よりも、タキのことが好きだった。　それが『愛』だったのかもしれない。

第7話：　結婚生活

結婚式を、一週間後に控えた日、心が落ち着かなくなっている自分に気付いた。

なんだろう？この感じ？

あたし、このまま結婚していいんだろうか？　本当にこれが答えだったんだっけ？

このまま進んだら、いけないような気がしていた。

もう、あれから、タキから電話も来なくなった。　また、他の女の子と付き合ってるらしいって噂で聞いたから、きっと、幸せにやってるんだろう。

そう、もう完璧に終わったの。

だから、これで良かったんだよ。

若干の不安は、哀しいけど的中した。今の彼が、日を重ねるごとに暴力的な面を見せるようになっていて、いつだったかは、私がちょっとタキのことを口にしただけで、思い切り平手打ちを受けたことがあったりした。

暴力が大嫌いなあたしは、そのことに、かなり引っかかっていた。口がすっぱくなるほど、彼に言った。

「あたしは、この世の中で暴力が一番嫌いなの。　だから、二度とこんなことしないで欲しい。もし、あたしに暴力を振るいたいぐらいの怒りを感じたら、まずは言葉で解決することをして。　結婚し

てから暴力を振るったら、あたしはすぐに離婚するから。」

「悪かった・・・」

そう言って、謝ってはくれたけど・・・

言葉の暴力も、どんどんエスカレートしている気もしていた。

あたし、大丈夫なのかな？

結婚式も終わり、二人きりの生活が始まった。

正確には、２ヶ月前から同棲していたので、二人きりの生活はだんだん慣れてきていたけど・・・

やっぱり、彼は・・・夫は、暴力的な人だった。

とにかく、言葉の暴力が酷い。　あたしを、どん底まで落とすようなことを、平気で言い続ける。　底の底まで落ちたあたしを見ると、今度は、これほどにないまであたしを褒めたりする。　そんなことが、とても嫌だった。

結婚してすぐに、間違いだったんだろうな・・・って気づいていたけど、決めたのは自分なのだし、一生添い遂げようと思って、自分なりにがんばっていた。

そんな矢先、妊娠がわかった。

２２年間生きてきて、一番の幸せだった。

あたしの命の中に、もう一つの命があるなんて。　こんな幸せってあるんだろうか？って。

でも、それもすぐに打ち砕かれたんだ。

夫に、
「妊娠したよ。」
あたしは、喜びをとても隠せなくて、顔中赤くして、夫に告げた。
きっと、『やったな！』なんて、言われるんだろうな。　って、期待してた。

なのに・・・

「堕ろしてくれ。」

その一言だった。
正直、何を言われたのか、わからなかったぐらいの衝撃だった。

『え？　あたしたち、結婚してるよね？　なんで？』

そう、心の中で思ったけど、でも、口にすらできなかった。

「俺は、まだ父親になる自信がないから、堕ろしてくれ。」

え？　ほんと、何言ってるの？

「冗談じゃないよ。　喩え、あたしが今高校生だったとして、一人で産むとしても、絶対にそんなことしない。　大切な命だよ。」

泣きながら訴えた。

夫は、その日、答えを出さなかった。
結局、翌日、生もうってことにおさまったけど、心はずたずたに引き裂かれたままだった。

いったい、あたしはどうなりたくて、この結婚を選んだんだったっけ？

そっか・・・

自分だけ幸せになりたいって思った罰だったんだね。

エゴだったんだね。

あたしは、本当にバカだよ。

第8話：　困惑

お腹が大きくなるにつれて、夫はだんだんと自覚が生まれてきたようだった。
それでも、あたしが体調が悪くても、飲み歩いて、遊び歩いて、不安な日は重ねていたけど、でも、言葉の暴力は少なくなっているようだった。

それだけで、あたしは安らいでいた。
明け方帰って来ようと、それも付き合いならば仕方ないし、って思えたし。

とにかく、うまくやっていきたかったんだ。

いよいよ出産ってときになって、駆けつけてはくれたけど、あたしは誰も傍に居て欲しくなかったから、母親でさえ外に居てもらって、一人で陣痛を越えて出産した。

女の子だった。

春の日なのに、その日は雪がちらついたんだ。　決して忘れない日になった。
そして・・・
何故か、お腹から出てきた子を、心から歓迎して喜んでいたのは紛れもない事実だったのに、寂しくて寂しくて仕方なかった。

もう一度、このあたしのお腹の中に入れて欲しいって思うぐらい、寂しくてどうしようもなかったんだ。

ふと、お世話をしにきてくれた看護師さんに言った。

「看護婦さん、もう一度、私のお腹に赤ちゃん戻してほしい・・・」

「え?!そんなこと初めて聞いたわ!!　１０ヶ月、苦しかったでしょう?あなた、切迫流産で入院もしてるし・・・」

「いえ、一番幸せでした。　あの子がお腹にいて、ずっと一緒でいられたから。　だから、あの子が無事に生まれてくれたことはすごくありがたいんだけど、寂しい。　どう言っていいかわからないんだけど、寂しくて仕方ないんです。」

「大丈夫?　でもね、すぐに、忙しくなるし、赤ちゃんと居られることが幸せになるるわよ。」

そう言って、・・・っていうか、どう言っていいかわからないように、看護師さんは処理を終えて病室を出て行かれた。

言ってることはわかるんだけど、でも、どうしようもないこの気持ちは、どこへ向かえばいいんだろう?

１週間が過ぎて、退院してからは、看護師さんの言うとおり忙しくてそれどころではなくなっていた。
しかも、殆ど彼女と一対一で過ごす毎日。
夫は・・・帰って来ない。

一人きりで育てているようなものだ。
だけど、彼女がいるだけで幸せだった。

子供が生まれてから、夫は、また元に戻ってしまったように、いや、以前よりも酷くなって、家を省みないし、暴力的な面は増長していってたように見えた。

殆ど眠れない日々の中、あたしの頭も壊れかけていたのかもしれない。

彼女が2歳になったころから、夫が帰ってきてから、一人、真夜中に車を走らせることが多くなっていった。
何もない。　ただ、車を走らせるだけで、自分の時間を作りたかった。　ストレス発散だったんだろう。　夜眠れない。　家計を支えるために仕事にも行き始めた。　そして一人で子育てをする。　夫の暴力的な態度。　我慢が足らなかったのかもしれないけど、あたしには限界だったんだ。

そして、帰ってくると、また夫に攻められる。

そんなとき、久しぶりに、友達から誘われた。
「行ってくれば」
夫の了承を得て、出かけることになった。

あたし以外のみんなは、生き生きして見えたよ。
あたしだけ、くすんでるみたいだった。　それなりに、ＯＬのときはオシャレもして、楽しんで生きてて、みんなと変わりなかったのに。
今は一人、所帯じみた、くすんだあたしがいる。

昔のように、楽しく飲んでたら、昔行きつけだったその居酒屋の扉が開いて、にぎやかな連中が入ってきた。
そこに・・・タキがいたんだ。

あたしの目は、きっと、元々の小さいけどくるっとした目をもっとくるくるっとして、タキを見つめてたと思う。

「久しぶり！」
タキは、普通だった。
「元気か？」
「うん、元気だよ。」　普通を装ったよ。

「変わんねーな。」
「そおかな？　タキも変わんないね！」
「あぁ。」

ほんと、変わんない。　その、『あぁ』も。

タキの友人が、
「どうせなら、一緒に飲みましょうよ！」
って、言ってきて、一緒にわいわい飲むことになった。　みんな後輩だし。

楽しかった。
昔に戻ったみたいだった。
やっぱり、間違ってたんだろうな、って、ちょっと思ってしまうぐらい、楽しかった。
でも、間違ってたって言ってしまったら、大切な子供を否定するみたいだから、言わない。　これで、良かったんだ、って、思い込んだよ。

かなり盛り上がって、3件目まで行ってしまって、また夫の顔が浮かんだけど、まだ帰りたくなかった。

みんな、『明日があるから・・・』って、帰ってしまって、結局、タキとあたしが残った。

「幸せか？」タキが口を開いた。
「・・・・・ん」
「幸せじゃないのか？」
「子供ができてね、命だよ、あたしの。だから、幸せ。」
「そんなこと、聞いてねーだろ？　幸せなのかよ？」
「だから、子供があたしにはいるからね、幸せだよ。」

「全然、幸せじゃなさそうだろ？　自分でわかってんだろ？！」
「タキには関係ないでしょう？　あたし、自分で決めたんだし。」

「子供、連れて別れろよ。　俺、そんなに収入ないけど、二人で働いたらなんとかなんだろ？」
「幸せだって、言ってるでしょう？」
「俺、いい加減だったかもしれないけど、いい加減にミーのこと見てたわけじゃない。　だから、ミーが幸せなのかどうかは、わかる。　そんなの見たら、ほっとけねーだろ？」

「もう、遅いんだってば。　タキは、いつも遅いの。　前に言ったでしょう？　なら、なんでもっともっと早く、結婚しなくてもいいから、あたしを安心させてくれなかったの？　ずっとずっと、好きだったんだよ。　あたしも、酷いことしたけど、気付いてからは、

タキにどんなことされても、それで良いって思うぐらい好きだった。タキじゃないと、あたしはダメだったんだよ。　でも、タキは、違ったじゃない。　もう、遅いんだって」

「悪かった。　俺、すんげぇ意地張ってたし、ミーが大人になってくの、怖かったし。　結局、俺が子供過ぎたんだよな。だけど、今は、あの頃よりは大人になったと思う。」

考えた。
すぐ様、あたし一人だったらタキのところに、タキの胸の中に、昔のように飛び込めただろう。でも、あたしには、自分の命よりも大事な子供がいるんだ。

「タキは、それでも甘いと思うよ。　あたしと、子供を、って、やっぱり無理だと思う。タキは、タキがもっと自分の子供を、って思うときに、タキに合う人に出会ってから結婚したほうが良いと思う。
だから、バイバイ！　今日、楽しかったよ。」

そう言って、あたしは帰路についたよ。

だって・・・無理だもん。
でも、好きなんだって、また実感しちゃったじゃん。

神様って、いるの？
それとも、意味があって、あたしとタキを再会させたの？
辛すぎるよ。

そして、帰宅しても、辛すぎる。

青あざの出来る暴力を振るわれたよ。　追いかけられて、首を絞められて、『死んでくれ』って。
あたしは、どうすればいいのかも、もう考えたくなくて、
「うん、殺して。　もう、いいから」
そう頼んだ。　何も、考えられないぐらい、疲れきっていたのかもしれない。

そう言ったら、夫は首を絞める手を緩めて、あたしを抱こうとした。
あたしは、首を絞められるときとは考えられないぐらいの力で夫に抵抗したけど、犯されるように、ように、というよりは、まさに夫に犯された。

あたしの心は、心がハートの形をしているとしたら、端っこだけかろうじて残っているぐらいで、もう、跡形もなく壊れようとしていたんだ。

第9話：　命との別れ

もう、限界だった。　限界って、そう簡単に訪れるわけじゃないんだろうけど、私にはそう簡単じゃないことだったんだと思う。

青あざを顔中、体中に、そして、首には絞められた手の跡をつけたまま、子供も連れて実家に戻った。

「離婚したい・・・」

母に言った。

母は、

「お父さんのお仏壇の前で、言ってきな。」

心の中で聞いた。

『お父さん、別れてもいい？』

お父さんだったら・・・

『一度決めて家を出たんなら、一生添い遂げろ。　子供にだけは哀しい思いをさせんな！』

そう言うだろう、って思った。

父は、厳しい人だったから。

子供を一番に考えろ、って人だと思うから。

「お母さん、あたし、帰るわ。」

「そう・・・」

母は、目に涙を溜めていた。
あたしは・・・親不孝だ。　母は一人でがんばっているのに、娘のあたしがこんなだったら、安心して暮らせないだろう。

そして、実家の門を出た。

「歩こうー歩こうー私は元気～♪」
懸命に、テンションを上げようと、娘の手を繋いで、その手をブンブン振りながら歌って歩いた。　目からは、後から後から涙が流れていた。

ちゃんと、自分の足で歩こう。
それから、考えよう。

家に帰ると、仕事から夫が帰ってきていた。

「昨日はすまなかった。」
「うん・・・　あたしも、帰りが遅かったし、悪かったから。」

そう言って、普段の生活をなんとかこなした。

数日はそれで過ごせたけど、でもやっぱり夫の暴力は止まなかった。
もう、真剣に考えようって決めた。　このままじゃ、誰にとっても良くない。　夫だって、まだ若い。　あたしじゃなかったら、幸せ

な結婚を送れるかもしれない。　だったら、あたしは、子供と二人で生きて行こう。
実家に頼るでもなく、父はきっと反対するだろうけど、でも、あたしはあたしの頭で考えて、責任を取らなければいけない。　もう、母親なんだから。

その矢先だった。
タキが心配して私の家の傍まで来て、外で話しているときに夫が帰宅したのだ。
それを見た夫は、あたしだけではなく、タキにまで暴力を振るい、事件にまで発展してしまった。

タキは、あたしを最後まで守ってくれて、でも、夫はあたしを引きずり出して、靴のまま顔を蹴られて、お腹を蹴られて、そして、最後には刃物を出して殺そうとした。
隙を見つけて警察を呼び、なんとか2時間に及ぶ修羅場は終わりを告げた。

あたしもタキも、原型を留めないような顔になったまま、救急車で運ばれた。

夫は・・・
警察署に連れて行かれた。

訴えれば刑務所に入ったのだろうけど、あたしたちは訴えなかった。

そして、絶対に子供だけは離さないと決めていたあたしは、子供を失った。

何を言っても言い訳になってしまう。　夫側の親族はあらゆる手を使って、子供を連れ去って行った。
まだ小さかったけど、娘はしっかりしていて、
「ママは強いから大丈夫でしょう？　でもね、パパは弱いからいっしょにいてあげないとだめなの。」

あたしに・・・そう言った。
言わされたのだろうか？　それとも、自分の言葉なの？　言葉に詰まったけど、あたしには、元々言える言葉なんてなかったから、笑顔で娘に、
「そっか。　守ってあげてね。」
って、精一杯の言葉を吐き出したよ。

どうか、あたしたちにしたようなこと、他人にはしませんように。
　どうか、娘にとって、後ろめたいようなことだけはしませんように。
そう祈って、あたしは、命である娘と別れた。

それからのあたしは、もう、生きてる感覚すら失ってしまったよ。
タキにも、悪かったし、タキの両親にも、タキをこんな目に遭わせてしまって、申し訳なかったし、あたしの親にも、哀しませて、苦しめてしまった。

わかっているのに、感情が、哀しみしか無くなっているようだった。
　あたしが、真っ二つにわかれて、その片方がないような、喩えようがないけど、とにかく、息だけしていた。
その息も、深く呼吸することなく、時には忘れてしまうんじゃないか？と思うぐらい、歯を食いしばって、生きてた。

誰か、助けて。
ううん、助けなくていい。　殺して。
いや、自分でこの命を絶とうか・・・
そんな日々がどれだけ続いたんだろう。

第１０話：　生きていかなければ

なんとか生きてた。
私が死んでしまったら、もし娘が戻ってきたときに帰る場所がなくなってしまうもの。

そう思って、生きてた。

でも、もう、この苦しみから逃れたい。　この存在を消してしまいたい。

交互に浮かんでくるこの気持ち。
どうにもならなかった。

ひとりぼっちになって、哀しみを超えるのは、そう簡単じゃなかったんだ。

時間が経ってから、タキから連絡が来た。

「ミー、悪かったな。　子供・・・取られちゃったんだよな。」
「うん。」
「俺が、行ったからだよな。」
「あたしのほうこそ、あんな目に遭わせてしまって、ごめんね。」
「俺は、いいよ。」
「訴えてくれたら良かったのに。」
あたしは、言った。
「俺・・・後ろめたかったんだろうな。　ミーのこと、旦那さんから奪おうと思ったのは事実だったから。　それで、ミーんちの近く

に行ったからな。　旦那さんは、やり方っていうか、方法は間違ってるかもしれないけど、それほどミーのこと愛してたんじゃないかな。」

「間違ってるよ、タキ。　愛じゃないと思う。　愛があったら、愛してる人を殺そうとは思わないでしょう？　愛してる人に、ずっと幸せでいてほしいし、健康でいて欲しいんじゃないかな？　・・・もう、どっちでもいいんだけどね。」

「じゃぁ・・・好きだったのは確かだろ？　どうでもいいヤツが、何しても、どうでもいいはずだろう？」

「そう・・・だね。　好き・・・か。　うん、自分の次に好きだったんだろうね。　でも、本当にもうどっちでもいいんだ。　あたしね、自分が一番悪いってわかってるから。」

「どういうことだよ。」

「あたしはさ、タキのことすんごく好きだったんだ。　タキがいてくれたら良かった。　だから、何されても良かったの。タキと、同じ時間を過ごすことができるんなら、それで良かったのね。　でもね、焦っちゃったんだ。　いつからだろう。　早く自立したかったし、家族が欲しかった。　それにはタキしかいなかったけど、タキはそうではなかったでしょう？　あたしが何言っても、ダメだったでしょう？　それに、疲れちゃったんだよね。　あの頃。　それって、あたしも、タキのこと好きと言いながら、自分を一番愛してたんだと思う。　それで、勝手に片っ端から電話してさ、受け止めてくれたのがあの人だったの。　もう、落ち着きたかったんだよね。　反面、どこか違うって気づいてた。　でも引き返せなかったの。　だから、あたしが一番酷い人なんだ。」

「もう、自分を責めんな。　俺も、旦那さんも、かなり酷いことミ

ーにしたんだ。俺はさ、ミーは、何があってもずっと傍にいてくれると思ってたんだ。　勝手に思い込んで、好き勝手やってた。　いい女がいれば、そっちに行って、野郎どもの付き合いは、どこにでも顔出して。ミーは、俺がほっとしたいときに、呼び出して。　それが当たり前だと思ってたんだ。　まさか、ミーが俺の前からいなくなるなんて、考えもしなかったんだ。　バカだよな。」

「そっか・・・」

「でも、いなくなってしまったら、すんげー焦った。　恐怖って、すげぇのな。初めて味わったよ。　怖いんだよ。お前がいなくなるのが。　だから、恥とか度返しして、ミーのところに電話したんだ。　でも、ミーは、戻ってきてくれなかった。　・・・当たり前だよな。　その後が子供だよ。　今だったら、どんなことしても、婚約を破棄させても、俺はミーを連れ戻しに行ったと思う。　でも、あの時は、『ミーがそうならもういいよ。』って、切れたんだよな。」

「・・・・」言葉が出るわけないよね。

「だから、ミーが酷いとか、悪いとか、言うなよ。俺なんだよ、結局。」

「じゃ、みんな悪いってことにしようか？」

少し、タキが心を軽くしてくれた。　ありがとう、って心底思ったよ。

「そうだな。そうしよう。　俺も、旦那さんも、ミーも、みんな3等分悪いんだ。」

久しぶりに、笑った。

タキ、ありがとう。

タキとあたしは、哀しいけど、フリーになって、なんとなく一緒にいるようになった。　もう、気がついたら、あたしたち１０年になるんだね。
その間、あたしは他の人と結婚しちゃって、タキは、いろいろ他を見てきて。
今は、こうして、なんとなく一緒にいる。

結婚とかもう、前のことがあるから、考えないけど、あたしの傍にタキが居てくれることだけで、なんとか自分を保っていられたんだ。
もしかしたら、こんな歪んでるような人生が一番あたしには似合ってるのかな？なんて、思い始めていたのかもしれない。
それは、＝幸せだったのかも・・・

ずっと続けばいいのに。
生きていかなければいけないのならば。

第１１話：　来てしまったね

タキとあたしは、傍から見たら、付き合ってるような二人になっていた。
付き合っている、恋人同士の定義とはなんだろうか？と、ふと考えてしまうけど、きっと、そう見えるのだろう。

あたしは、そういう定義を受け入れることが出来ずに、結婚に対してもそうで、その文字や定義にこだわって生きることのほうが、ものすごく息苦しいことではないだろうか？と思っていたんだ。

好きだから、一緒にいて、その延長線上にその結果がある。　結果とは、唇を重ねることだったり、体を重ねることだ。　自然にそうなったならば、それでいいと思う。
そして、ずっとその人と一緒にいたいと思う気持ちがお互い熟したならば、その先に結婚があるのかもしれないし、それが、紙上のものではなくて、心の上のものであればいいと思う。

あたしは、だから、今タキと一緒にいることに対して、紙上のことなんてどうでも良くて、これから先のことも、一生なんてことも考えずにいられることだけで良かったんだ。　ただ、ただ、タキがいればいい、そう思っていた。

結局、出会った頃の二人みたいになっていたんだね。

あの時みたいな、幼い気持ちよりも、１０年も経って、結構感情も熟しちゃって、そんな二人だけど、あたしの気持ちは、あんまり変わりはなかったんだ。

ずっと、このまま、タキの顔を、横顔も、真正面の顔も、後ろ姿も、バカやってるとこも、怒ってるとこも、哀しそうな顔も、ずっとずっと見ていたかったんだ。　それだけで、良かった。今のあたしにとって、それで良かったんだ。

タキも、

「俺は、ミーとずっといるからな。　横目も振らねーし、誰がなんと言おうと、ミーといっからな。」

って、言ってた。

あたしは、なんだかわかんないけど、若干の不安を抱えてたけど、でも、タキを信じるとかそういうことじゃなくて、ただただ、今を生きてたよ。　それでいい、って思ってた。

そんな二人に、ストップをかけたのは、昔仲良くしてくれたタキのお母さんだった。

ちょっとだけびっくりしたけど、でも、当たり前だろうとも思った。

あたしは、バツイチの子持ちだもん。

タキは、何度も掛け合ったみたいだけど、お母さんは、

「明日美ちゃんは、大好きよ。　本当に、いい子だと思う。　何もなかったら、お母さん、すぐにも賛成するよ。　でも、子供がいる明日美ちゃんとの結婚は、お母さんは許せない。　いつか絶対にうまくいかなくなると思う。」

って、そう言ったこと、タキがあたしに言った。

で、そう言われたから、明日美とはいられない、って。

終わったんだ。

あたしも、普通の感覚でいったら、親はそう言うと思うし、それをタキがあたしに言った時点ですべてが終わったって思った。

親は大切だよ。　あたしも親は大事。　もう、今はいない父親に対しての思いも、多分・・・普通に愛されて育った人間よりも深いかもしれない。

母親も、表現しようもないぐらい大事。　だって、どんな人生だったとしても、母親がいなかったら、あたしは、この世の中に生まれてきていなくて、そして、幸せも苦しみも、所謂人生を知ることすらなかったのだから。

だから、タキがそう言ったら、ダメな親だけど、母親のあたしは、有無も言えないぐら理解できちゃうんだよ。

例えばあたしが、結婚をしていなくて、普通に育ってきた子だったとしたら、

「やだ！一緒にいて！！」

なんて、言えたんだろうな。

でも、あたしには無理なんだ。

それをできないあたしがいるんだもん。　そして、それで良いんだって、思ったの。

「タキは、今、どういう気持ちでその言葉を言ってる？」

「どういう気持ちってなんだよ？」

「うん・・・どう言って欲しいとか、あるかな？って。」
「いや、何もない。　事実を言ってる。」
「わかった。　それが聞けて良かったよ。　もう、これで別れよう。」

沈黙・・・

「それしかないのか？」
「それしかない、って、タキが一番わかってるでしょう？」
「そうかもな。」

やっぱり、別れるんだよね。
きっと、そうかもな・・・って、不安材料として、あたし、持ってたみたい。
あんまり、ビクついてなかった。

「じゃ、幸せになってね！」

手を差し出したよ、あたし。

「わかんねぇ。」

タキは手を握ってくれなかった。　だから、そのまま、その場を去ることにしたんだ。

タキ、本当に幸せになってよ。
じゃなかったら、やだよ。
あたし、タキの幸せを、心の底の底の底の奥底から、出来る限りのあたしで祈ってるからね。

第１２話：　ありがとう

いっそのこと、ずっと一人ぼっちだったほうが、良かったのかな？って思ったりしたけど、でも、やっと『二人』でいることができたから、それはそれで良かったんだ、って思う自分がいた。

正直、元々タキと一緒にいられるなんて、結婚してから思ったことなかったし、大部分が苦痛だった結婚生活を考えたら、それだけで幸せだったんだと思う。

でも、いざいなくなってしまったら、ちょっとずつ慣れてきた娘のいない生活も、寂しさが倍増してしまったような気もするし、簡単じゃなかったけど、それは自分で越えなければいけないことなんだ、って、やっとわかったような気もしていた。　それだけでも、感謝だよ。

時間が経ったことで、元夫との結婚生活や、彼の気持ちなどを冷静に考えるようにもなれて、そうなると、心底申し訳なかったな・・・って思うようになった。
彼だって、あたしと出会わずに、別の、もっと幸せになれる女性といつか出会って、幸せになれたかもしれない。　暴力なんて、振るわずに済んだのかもしれない。
きっと、彼だって、どうしようもなくてそうしてしまったんだろうから、それは、しなくて済んだならば、それが一番良かったんだろうな、って。

あたしだから、そうなってしまったのかもしれない。

『かもしれない』っていう、推測に過ぎないけど、『もしも』なんて、人生にないってわかってるけど、そう思った。

だから、尚のこと、彼の幸せを願うんだ。

娘のルーツである、あたしと元夫。
それが大きな理由ではあるのかもしれないけど、それだけじゃないよ。　あたしは、一時、一瞬、あなたを思ったんだよ、って、思い返すことができるようになったんだ。

あたしの勝手で一緒にいるようになったけど、タキのこと、ずっと思ってたのも事実かもしれないけど、その間の、あたしの空っぽの心を埋めてくれたのは、紛れもなく彼だったんだから。　だから、結婚し、命である娘が生まれたんだもの。

あたしと、彼がいなかったら、娘の命もなかったんだ。
その事実を、真正面から受け止めることができるようになったんだね。

誰のせいでもないの。
あたしが自分で選んだことなの。

だから、あたしを支えてくれたみんなに、感謝しかないんだよね。

これから、もう、タキはいない。
ちょくちょく、割り切れない気持ちのままのタキは電話をしてきたり、あたしの部屋に何度も何度もインターフォンを押したりするけど、決して応答しなかった。
そうしないことが、いいんだ、って思えるようになったから。

あたしは、ずっと、自分のことばっかりだったんだね。
タキに対して、『なんで？』ばっかりで、『タキがそうだから、あたしはこうなんだよ。』っていう理由付けをしてたんだね。

でも、そうじゃないってわかったよ。
あたしが決めたのならば、タキがどうでも、貫き通せばよかったんだ。　それが出来なかったあたしの責任だったんだよね。

やっとわかったの。

だから、もう、会わずに、話さずに、終わるのが一番いいって、そう思えるようになったんだよ。

苦しくて、哀しくて、どうしようもないけど、あたしの目一杯の愛なんだと思う。

あたしね、ほんとに、ほんとに愛してるんだと思う。
いつか、『ほんとに愛してたよ』って言える、過去形になれたらいいなって思ってるよ。

タキ、ありがとう。

出会えて、本当に良かった。
タキというスパイスが、あたしの人生に最高の味をくれたよ。

エピローグ

タキと出会ってから、約１０年、あたしは『ずっと愛してた』とは、とても言えないような、『結婚』という逃げ場を作ってしまったけど、それでも、心の奥底ではタキをずっとずっと思っていたような気がする。

酷いと言われても、誰に罵倒されても、それが事実だ。

タキが、一切あたしに連絡をしなくなってから、半年。
風の噂で、できちゃった結婚するらしいよ、って聞いた。

半年か・・・なんて、ちょっとセンチメンタルになったりもしたけど、でも、タキが幸せになるなら、それが一番いいんだ、って思えた。

あれから更に１０年経ったんだね。
あたしもいろいろあったけど、なんとか生きてる。　なんとかっていうより、今は生きていることに喜びすら感じるようになったよ。

タキのことは、今も思うんだ。
タキ、幸せかな？　『大変らしいよ』なんて、聞くと、心がギュってなる。　大丈夫かい？って。

でも、きっと、タキはそれなりに生きてくんだよね。　あたしが何か思うなんて、しない方がいいんだよね。

もう、さすがにあの頃のように、タキじゃなきゃ嫌だ、なんて思わないけど、あたしね、きっと一生タキのことは頭に浮かぶんだと思うよ。

ほんとに、ほんとーに、愛してたんだと思う。

子供は、あたしの命だって、今も変わらず思うけど、タキはね、あたしの命を引き換えにしてもいいって思える人だった。　後にも先にも、タキだけだよ。

人生の中で、誰が何と言おうと、自分自身がそれだけ思える人に出会えたってだけで、あたしはすごく幸せな人間なんだって、思うんだ。

タキ、本当にありがとね。

タキ、ほんとにほんとに、愛してたよ！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3390c/

ほんとに愛してたよ

2010年11月30日22時05分発行